

2018年1月14日

「家族の会」その理念、歴史、実績を学ぶ学習会

こんな話がありました

医師 早川 一光

1. 中二階の座敷ろう

ある日、おばあさんが風邪をひいたので、診に来て欲しいと頼まれ、西陣の路地奥の家に向かいました。そこは京都独特の中二階のある家でした。往診かばんを持って、玄関の戸を開け、階段をあがり、さて、その中二階の部屋の戸を開けようと手をかけましたが、開きませんでした。見ると、鍵が三つかかっている。どうしたものかと思立っていると、下からお嫁さんが上がってきて、「すみません。こうしとかなないとお義母さんがどこかに行ってしまうんです・・・。」と申し訳なさそうに言われました。

「そうですよね、お歳をとられると。。。。」と言いながら、部屋に入ると

ぞろり。

下穿きもはかずに、床の間にぼうっと立っている、おばあさんがいました。下は垂れ流しのまま、畳は、しめっぽく、色が変わっていました。

「あ、これはただ者ではない。ただの普通の熱ではない、風邪ではない」と思いました。風邪をひいたとともに、高熱が出て、おばあさんは徘徊が始まっている、そのおばあさんを、じーと辛抱強く眺めてきた、家族の努力が中二階から、あふれでていました。

これが、私の、惚けていかれるお年寄りと、家でみようとす家族の人の苦労を共にしようと決意をかためた最初の出会いでした。

これは、このお年寄り個人の、また家族の問題ではなく、これからこういうお年寄りが社会にたくさん出てくるだろう、こういう人たちを支えてくれる社会を作らないといけないと感じました。

2. 「あんたの休みはいつや？」

夏の暑い日、蒸せるような部屋で、90歳近いおじいさんが、寝ていました。お年寄りには、特に、水分補給が大事だと、毎日、点滴をしに往診をしました。次第に、おじいさんの血管が細くなり、点滴が入らなくなる腕、ここでもない、

あそこでもないとする血管を探し、痛いのを我慢してください、と繰り返すよう
になってきました。

やっと針が入って、「はいった〜」とおじいさんの顔を見ると、おじいさんは僕を
下から眺めながら、

「あんたの休みはいつや？」

とたずねました。

一瞬、迷ったのですが、

「おじいさんが治った時が、俺の夏休みや。」

と答えました。

おじいさんは、僕を下から見つめながら、ぼろぼろと涙をこぼしました。

僕は、その涙を見て、

「もろたあ。」

何をもらったかと言ったら、往診代でもなんでもなく、おじいさんの「命」をい
ただいたと思いました。

僕は、お嫁さん呼んで、

「今晚、みなさん、親類の方、集まってください。目を離さないように。」

その晩、家族に見守られながら、おじいさんは息を引き取りました。

3. 認知症は病気か。

歳をとったら、何かしら出て来る。認知症も衰えの一つではないか。

しかし、他の老化現象と違うのは、認知症は自分で出来なくなってしまう、
誰の世話にもならないという訳にはいかない。

だから、社会の支えが必要だと考えました。